

「2023年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学医学部1年 原 淳裕

大学内の様々な留学生との交流活動に参加していたが、自分が留学生として扱われる感覚を味わったのはこの香港中文大学サマースクールが初めてだった。希少な存在として、その国の代表のように扱われるような感覚があった。その際に私は日本人として、歴史や伝統のみならず留学先の現地学生が関心を抱いている日本のカルチャーを理解しておくべきだと感じた。学校生活では香港中文大学の学生の並外れた行動力、自主的に活動する姿に圧倒された。一緒に参加した京都大学学生も非常に熱意がある。この期間を通して、自分が本当は苦手だったことや反対に自分が気づけなかった得意分野が見えるようになった。それはたくさんの留学生が全力であらゆる活動に参加している姿を四六時中観察できたからだと考えている。国際理解については、サマースクール参加生や現地の方と政治や社会問題の話になった際自分が他国のみならず自国の政治や社会問題について無知であると痛感した。これからは視点を日本に固定することなく、様々な国のメディアの情報を収集することにする。この三週間で起こった最大の変化は自分の個性「真面目」を肯定できるようになったことである。私は子供の頃から学校で「真面目な存在」と扱われてきてクラスメートから形容し難い距離感を保たれているように感じていた。しかし、本サマースクールは京都大学の中でもとりわけ熱心な生徒が集まっており授業への積極的な参加や質問も躊躇しなくてよかった。さらに現地の学生や同じ留学生、向こうの先生から「努力」の観点からほぼ毎日褒めていただいたことが、今まで嫌いだった自分の性格を只管に肯定してもらえた気がした。ただただそれが嬉しかった。全員が認めてくれなくても自分がやりたい、正しいと思うことをやって肯定してくれる人はどこかにいるのだと心から実感した。所属学部のカリキュラム上、学年が上がると長期休みの融通が利かなくなるため、来年の夏もしくは今年の冬にもう一度語学留学へ行くことにする。学科の都合上、京都大学で中国語を履修できないためこのサマースクールに参加することにしたが、そのような私でも毎平日3時間(休み時間含む)×2の授業と毎日の宿題、自主的な予復習で中国語学習の土台が完成した。生きた言語の習得にはネイティブの発音指導が不可欠であり、その点でサマースクールの少人数制授業を通して「生きた言語」を短期間で学ぶことが出来た。進路については、元々医学留学や海外で研究をする予定だったので大きな変化はないが「海外で研究したい」という感覚が「自分は海外で研究することになるだろう」という確信に変わったような感覚がある。